
君のいない明日

烏丸はるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君のいない明日

【Nコード】

N2059N

【作者名】

烏丸はるか

【あらすじ】

アッシュフォード学園がテロリストに占拠された。

柄にも無くテロリストに楯突くルルーシュを横目にカレンは黒の騎士団として事件の解決にあたるも敵を倒したところでブリタニア軍の横槍を食らい撤退。

その後カレンは教室に戻るも、そこにはルルーシュの姿が無かった。時間軸は成田山戦の直前くらいから。

第一話（前書き）

体調崩して2年ほど放置してた小説。

復調したので完結予定ですが、元シリーズも終わってるし、モブとか大分忘れてるし勉強しなおさなくちゃなw

2まで書いてある。

読みにくいのは仕様です。完結したら最初から書き直すつもり。

表紙だった物/<http://extranumbers.web.fc2.com/secondary|illustr/4962070|3970037323.jpg>

挿絵付き（当時のまま）/<http://extranumber>

s.web.fc2.com/secondary|novel/

geass/kimiop.html

第一話

「朝のニュースです。まずは昨日のアッシュフォード学園占拠事件の続報ですが、5時間に渡り生徒を人質に取って学園を占拠した、自称『日本奪還同盟紅の月』の主要メンバーと思われる遺体は全て回収され、現在はテロ対策班による身元割り出しが行なわれていきます。」

近年イレブンによるテロ事件が増大する中でも今回の事件は特に悪質を極め、最悪の事態が予想されましたが、コーネリア総督のご尽力で生徒や学園関係者等に被害が殆ど出る事無くテロリストを殲滅できました。」

早期解決に被害者の関係者も胸を撫で下ろしている模様です。」

先程の記者会見で政庁は、我々はテロと言う卑怯極まりない愚行を許しはしない。自由と平和のためにこれからもテロと闘い続ける。と意思を強く表明いたしました。」

ちなみに、『紅の月』と交戦した後に逃亡した『黒の騎士団』の行方は引き続き捜査中です。」

次のニュースです……」

ニュースキャスターが次の原稿に向けた視線が不意にフレームの外へと向けられ、何かを追うように右から左に流れ、横からイヤホンマイクをつけたラフな衣装のスタッフが強張った様子で現れて新たな原稿を手渡した。」

予想外の出来事にキャスターはいつものポーカーフェイスを不安げに崩してマイクで拾えない呟きをスタッフに向けるが、直ぐに姿勢を正して新たな原稿を視線で追った。」

その次の瞬間、ニュースキャスターの明るい茶色の瞳を零れんばかりに見開き激しい動揺に揺らすと、上ずった声で原稿を読み上げ始めた。」

「さ……先程のアッシュフォード学園占拠事件の続報です」

読み上げ始めるも緊張に声が震え、ニュースキャスターは思わず唇を舐めた。

「昨日コーネリア総督率いるテロ対策部隊が『紅の月』とは別に『黒の騎士団』と交戦した際、『黒の騎士団』リーダー“ゼロ”の首級を上げたとの報告が上がってきました！」

繰り返します。『黒の騎士団』の“ゼロ”の首級が上がりました！
ニュースはこのまま特別放送番組となります！」

画面は特設のスタジオ会場へと切り替わった。
世界に衝撃が走った。

飛ぶ鳥落とす勢いで勢力を拡大し、ブリタニアに対するレジスタンスを掲げていたテロ組織、『黒の騎士団』のリーダー“ゼロ”の意外な幕切れ。

彼等に煮え湯を飲ませ続けられていたブリタニア人はホツと胸を撫で下ろしたが、ブリタニアの占領国民として虐げられ、ゼロに希望を抱いていたナンバーズ達は更なる絶望の淵へと追いやられる事となった。

特に 占領区の中でも抵抗運動が激しく、黒の騎士団の拠点でもあるエリア11において、カリスマの死はレジスタンス達の士気を壊滅的に殺ぐには十分すぎる事実だった。

* * *

『アツシュフォード事件』から一夜明けた早朝の東京租界。

朝と言えども冬に向かう晩秋の空は未だ日は昇りきらず、太陽の気配が褪せた紺色に僅かに群青のグラデーションを拡げ始めている程度で、世界は未だ眠りの底にあった。

だが、租界に広がる静寂はどこか落ち着きを欠いている様な気がした。

ミレイ・アツシュフォードはメイドの咲世子からカレン・シュタットフェルトが訪問してきたとの報告を受けると、寝癖もろくに直

さぬまま足早にエントランスへと向かった。

学園をあんな大事件が襲った直後だ。生徒会のメンバーには困った事があればいつでも自分を訪ねて良いと事前に言っていたので早朝と言う時間は気にしてはいなかった。

「カレン、どうしたの？」

エントランスのソファに縮こまる赤い髪の少女の背中を見つけると、駆け寄って細い肩に手を掛ける。

「会長……」

カレンは考え事をしていたのかミレイの気配が肩に触れると撥ねる様に振り返り、溢れる不安に張り詰めた表情を微かな安堵に崩した。

不安げな後輩の様子にミレイも表情を曇らすと、膝を寄せて冷え切った細い身体を抱きしめた。

可哀想に、こんなに震えて。

頼られるからには先輩として出来る事は何でもしてやりたいと思っただ。

「大丈夫？何があったの？」

ミレイの心配げな眼差しにカレンは暫く唇を固く引き締めていたが、物言いたげに唇を軽く戦慄かせると消え入りそんな声でポツリと呟いた。

「 シュから連絡、来てませんよね……」

「え、誰から連絡？」

カレンの言葉が良く聞き取れず、思わず抱いていた身体を引き剥がして聞き返すミレイ。

「えっ？だから、ルルーシュから……」

「へっ……？ るる？ ……ん？」

ルルーシュ……聞き覚えの無い名前にミレイは首を傾げる。

一体誰の事だっただろう？ミレイは必死に記憶を手繰るも、ルルーシュなる人物の情報は欠片も引つかからず、思わず滲む気まずさを隠すように視線を逸らして自分の頬を撫でる。

どうしよう。記憶力には自信があつたはずなのだが、さっぱり思い出せない。カレンの様子から見ても『ルルーシュ』と自分は面識があるようだが。

「ええと……その……うん。連絡は、無いかな。ルルーシュくんからは……たしか、恋人……いやいや何でもない……あはは……」

憶えていないのに適当な事を言うのは不味いだろう。ただでも落ち込んでいる彼女に「誰だっけ？」とは訊きづらい。

急にそわそわし始めたミレイの様子を、カレンが怪訝な様子で見詰めている。

「……会長、どうしたんですか？」

どうしたのと聞かれ、答えに詰まって口籠るミレイ。とは言え、知らない事はどうひっくり返っても答えられないので、正直に答える事にした。

「うん……ごめん。誰だっけ？」

ミレイが申し訳なさそうに肩を竦めて苦笑すると、カレンは青い瞳を見開いてとても奇妙なものを見たかのように眉を顰めた。

「何、冗談言ってるんですか？こんな時に！ひと一人の命が危ないって言うのに性質の悪いお遊びはよしてくださいよ！」

「命が危ない？何の事？さっぱり話が見えないわ。もしかして昨日の占拠事件に関係あるわけ？……でも、あれは怪我人が数人出ただけで行方不明者が出たって報告は上がってきてないけど……」

「は……行方不明者が居ない？どう言う事ですか？こっちは一晩中探して……あ、いや何でもありません……」

「はあ?!」

カレンに詰め寄られ、驚いてソファの隅に逃げるミレイ。

落ち込んでいたと思つたら急に興奮したり、普段の彼女からは想像もつかないくらい支離滅裂なカレンの様子にミレイは不快の色を滲ませた。

「兎に角、ルルーシュは居たんですか？居なかつたんですか?!」

「だから誰？一体何なのよ?!」

さっぱり何を言っているか解らない。こんな朝っぱらに押しかけ
てくるから何かあったと思って心配して来てみれば、訳のわからない
事ばかり。

カレンの話から推察するに、大事な人の行方が分らないせいでき
つと軽いパニックにでも陥っているのだろうが、ここはガツンと言
って落ち着かせないと彼女のためにもならないだろう。

「きつとナナちゃんも心ぱっ……………」

ミレイは詰め寄るカレンの肩を掴んで押し戻すと、カレンのもの
より薄い青の瞳に怒りを滲ませて、はつきりと言いきった。

「カレン。貴女も色々大変かもしれないけど、人の話は良く聞いて。
私はルルーシュなんて人知らないわ。一回ぐらい顔をあわせた事あ
るからカレンもここに来たのかもしれないけど、私、憶えていない
から」

少し言い方がきつくなってしまったが、本当の事だからしょうが
ない。

急に態度を一変させたミレイの勢いに驚いたのか怯えているのか、
カレンの肩も震えている。

「会長…………ルルーシュですよ？ルルーシュ・ランペルジ…クラブ
ハウスに、住む…っ！」

「クラブハウスに？クラブハウスにはナナちゃんしか住んでないじ
やない。カレン、ちょっと…………ううん。大分疲れてるんじゃないの
？ベッド貸すわよ。ちょっとと休みなさいよ。寝てないんでしょ？」

その瞬間、カレンが何と言ったかは判らなかつたが、唇が短い呟
きの形に戦慄くと、力が抜けたように頭が傾いだ。

ただでも白いカレンの頬が、今にも透き通って消えてしまいそう
な程に青ざめている。

「カレン…無理しないで。その子、うちの学生なんでしょ？だつた
ら慌てるのは今日学校に来ているか来ていないか確認してからでも
遅くないと思うわ。だから……………」

ミレイなりに氣遣ったつもりだったが、いつになく動揺している

らしいカレンには届いてはいないようだった。

話を通じなかったのが相当ショックだっただろう。それから暫く俯いて静かに泣いていたが、ミレイが何も言わず黙っていると、カレンは諦めたように立ち上がった。

「すみません…帰ります…」

余りにも気落ちしたカレンの様子にミレイは思わず、探すのを手伝おうか？と声を掛けようとして押し黙る。手伝ってあげたいとは思うが、今はそんな余裕は全く無かった。

ミレイはアッシュフォード学園の生徒会長として、学園を襲った災いの後処理に追われていた。カレン一人に構っている訳にはいかないのだ。

伸ばされたミレイの手からカレンの腕が擦り抜ける。彼女の気になったものの、結果的にミレイは引き止めなかった。

ごめんね。心の中で手を合わせるも、立ち去ってゆく後姿に後味の悪さばかりがミレイの身体に染み広がってゆく。

声は掛けられなかった。

カレンが立ち去ったエントランスで感情の籠らない声で一つ、聞き覚えの無いはずの名前を呟く。

「ルルーシュ……ランペルージ……」

記憶には無いものの、ランペルージと言う苗字が気になった。

この苗字がめったに居る苗字ではないことはミレイが一番良く知っている。

帝国を追われたナナリーを守るためにアッシュフォード家が彼女に与えた名前だからだ。

それと同じモノを持った人物が居たとして、一度でも見かければ記憶に残らないはずが無いのだが…

(一体、何だっというの?)

咽喉の奥に何か引つ掛かっているような不快感がミレイの中に残った。

結局、カレンは気持ちを落ち着ける事が出来ないまま、学校へ登校していた。

悪い夢だと思いたい。ルルーシュが見つからないなんて……

徹夜明けで重たく澱む脳裏に、ミレイとのやり取りが苦々しく甦り、カレンは思わず寝不足とは違う眩暈を覚えて廊下の壁にすがる。「カレンさん体調悪いの？」

通りかかったクラスメイトの女子がカレンの様子に気が付いて駆け寄ってくる。

「ううん。大丈夫……ちょっと眠れなくて……」

「ああ……昨日あんな怖い事あったもんね。私も直ぐに眠れなかったの。あんまり無理しない方がよいよ。ただでも身体弱いんだし……保健室で休んだ方が良くない……？」

「大丈夫。……ホントに大丈夫だから」

氣遣う彼女の手を労うように優しく握って振り切ると、すっかり回復したと言わんばかりにしっかりとした足取りで教室に向かいながらルルーシュの事に思いを馳せてみる。

ルルーシュ・ランペルージ……自分と同じアツシユフォード学園に通うクラスメイト。彼は普段、自己主張の強い性格を持つ割に目立つ事を避け、一歩下がった所から物事を見詰めている事の方を好む少年だ。

声高に主張する事はせず、明晰な頭脳を持っている事を鼻に掛け、物事を斜めに見て何でも解った気になっているような節さえある彼の事を、カレンは余り好きではなかった。

だけど……。

教室の手前で歩みを止め、視線を床に落とす。

だけど、“あの日”は違った。

記憶にも新しい、ほんの一日前の出来事。事件の日、彼は何を思ったのか教室を占拠していたテロリストの前に立ちはだかった。

その瞬間、彼の行動にクラスの空気が違った意味で凍りついた。

“あのルルーシュが？”

誰もがそう思った。

そう、彼はこんな時に飛び出すような人間ではなかったはずだ。しかし、彼はクラスメイトの動揺を余所に柄にも無く武装した危険人物達に突っかかるような物言いを仕掛けると、案の定怒りを買って引つ立てられるように教室を連れ出されてしまった。

予想外の出来事に殆どの人はテロリストへの恐怖すら忘れて呆然とその様子を眺めていた。

扉の向こうに彼の姿が消えた頃に漸く情報が脳に到達したらしく、その後暫く教室内は騒然となった。

その様子に残されたテロリストの見張りもたじろいだ程だった。カレンは直ぐにでも助けに向かいたかったのだが病弱を装っている手前派手に動く事が出来ず、そうこうしている内に黒の騎士団もやってきた。

見張りが混乱している隙を突いてやっとの事で教室を抜け出すとそのまま紅蓮式式へと向かった。テロリストを片付ける方が先決だからだ。だからその時は結局ルルーシュの安否を確認する事は出来なかった。

もちろん不安だったが、助けにいけない以上彼の事だから何とか切り抜けてくれると信じて少しでも早い事件の解決に臨むしかなかった。

戦闘はブリタニア軍の介入もあり、困難を極めたが、やっとの思いで『紅の月』のリーダーを討ち取ると、コーネリアとの無駄な戦闘を避けて逃げるように撤退した。

それからカレンは急いでクラスへと舞い戻ったが、幸いクラスメイト達に別状は無く、胸を撫で下ろした。

だが、一安心したのも束の間。

すぐに全身から血の気が引いてゆくのが感じた。

ルルーシュがクラスへ戻って来て居なかったのだ。

達も相当なものだ。

あの（ミレイ）会長と（ルルーシュ）副会長にしてこの生徒会あり、といったところか。

それにしてもここまで心配されないとはルルーシュ本人も思っていないだろう。日常の素行が物を言う典型である。

しかし、何だかんだ言いつつも気になるのか、誰かが言い出した訳でも無く各自心当たりを当り始めた。

その心当たりが全滅すると、今度は街へと出て探す事にした。

最初は軽いノリだった搜索も、時間に経つにつれて空気が一つ、二つと重くなり、時計の針が午前に指しかかろうとする頃には表情すら完全に消え去って焦りさえ滲んでいた。

これは本当に危ないかもしれない。誰もがそう認識し始めていた。とは言え、夜も遅い時間に真つ当な学生が治安の未だ安定しない租界をこれ以上うるつく事も出来ないのです、一旦はお開きの流れとなる。

きつと明日にはひょっこり顔を出すと信じて……。

……だけど。

ミレイにあんな事を言われてしまうなんて思いもよらなかった。

ルルーシュなんか知らないだなんて……。

会長：アレが演技だとしたら相当怒ってるわよね。きつと色々考えている間に頭来たんだわ……ルルーシュの奴、一体どう收拾つけるつもりなんだろう？

（……無事で居ればの話なんだけど）

嫌な想像ばかりが駆け巡り、カレンはそれを振り払うように頭を振る。

兎に角教室へ行こう。話はそれからだ。

お願いだからいつものように知らぬ顔で居眠りでもしてほしい。

その澄ました顔を思いつきりぶん殴ってやるから！

そう、意を決して教室へと踏み込んだ。

「あ、おはようカレン」

出入り口付近でクラスメイト数人とたむろしていたソフィがカレンに声を掛ける。

「お、おはよう……昨日は大丈夫だった？」

「うん。お陰様で何とも。シャーリーは何か興奮していて、結局夜中まで起きてたみたいだったけど……」

ソフィは学園の女子寮でシャーリーとルームメイトだ。

「シャーリーは？」

いつも真つ先に自分の下へ駆け寄ってくる彼女の姿が見えないのが気になる。

「そう言えば……どうしたんだろう？ 朝起きたら居なかったよ？」

「そう……」

彼女もルルーシュを探していたのだろうか？

シャーリーのルルーシュに対する執着は並々ならぬものがあり、その事を知らないのは想いを向けられているルルーシュ本人くらいのものである。

昨日も本心はどうであれ、お気楽な生徒会メンバーの中でも彼女一人が一番不安を露にしていたし、他のメンバーがダウンして帰った後も、カレンと一緒に随分遅くまで探し回っていた。

「そんな事よりさあ、ねえ聞いた？」

「え？何を……」

ソフィは随分と興奮した様子で紙切れを寄越して見せた。

「号……外？」

「ゼロよゼロ！黒の騎士団のゼロをコーネリア様がついに討ち取ったの……！」

「えっ……どどどどどう言っ……」

カレンはソフィの言葉に耳を疑い、彼女の持っていた号外を引っ手繰ると食い入るように読む。

“テロリストゼロをついに討ち取る……！”

白黒の記事に大文字で仰々しく踊る見出しにカレンの頭は白くな

る。

「う、嘘でしょう……?!」

「嘘じゃないわよー今日はもうこの話題で何処も持ちきりよ……ってカレン?あれ??」

気が付くとカレンの姿はそこには無く、ソフィは首を傾げた。

「あつ電源切れてる……」

扇と連絡を取るために人気の無い校舎裏まで来て携帯に手を掛けると、いつの間にか電源が切れていた事に気が付いた。

そう言えばルルーシュを探している時、携帯が妙に静かだと思ったのだ。

何かの拍子にうっかりやってしまったのだろう。これでは連絡が来る訳が無い。

慌てて電源を入れ、扇の携帯へと掛けると、扇もカレンからの連絡を待ちわびていたのだろう。三回もコールすると通話に切り替わった。

「扇さんごめんなさい!!何か間違つて電源切つてしまっていたみたいで!!」

『この馬鹿野郎何やってやがる!!こつちがどれだけ連絡したと思つてるんだ!!』

「ほんつと、ごめんなさい!こつちも色々あつて……つて、玉城……?!」

スピーカーから放たれる怒号から距離を取るも、電話の音が扇のものとは違う聴き慣れた声である事に気が付き一気に拍子抜けする。

「何で玉城が扇さんの携帯に出るのよ!!扇さんはどうしたの?!」

『そつちこそどこ行ってやがった!どつかの誰かさんのせいでこつちはおもうてんでご舞いだつてのに』

「ごめんなさい……私も気が動転して……」

『オメの事は正直どうでも良いんだよ』

「なつ何よ！そんな言い方は無いじゃないの。そりゃ…確かに、私が悪いんだけど…」

いつにも増して投げ遣りな玉城の様子にカレンはカチンと来るが、落ち度は自分にある分余り強い態度に出切れず語尾を濁す。

『何ボシヨボシヨ喋ってるんだよ。そんな事よりゼロだよゼロ！お前もニユース聞いたろ。』

アイツ、ついにへマしやがった。だから俺は言ったんだ。ああー……、どうすんだよおもうー！」

「ごめん玉城、私色々忙しくてついさつきその事知ったの。ホントなの？ その……ゼロが……死んだって……」

死んだ。

その言葉はまるで鉛を吐き出すような重さでカレンの喉を締め付けた。

あのゼロが死んだなんて、信じられるはずがない。

その件に関して玉城も同じ思いのようで、否定も肯定もせず突きつけられた現実のみを淡々と語った。

『……ホントの所は判らねえ。俺達を動揺させるための虚報かもしれない。だけど、アイツと連絡が未だに連絡付かないって事は事実だ』

「そつなの……」

突き付けられた現状に、焦りと後悔が湧き上がる。

カレンにはルルーシュの事とは別に心残りがもう一つあった。

矢張り昨日の事件の時、カレンはゼロの乗る無頼と行動を共にしていたのだが『紅の月』のリーダーの駆るガン・ルウと戦闘中、黒の騎士団の宿敵たるブリタニアの白兜の強襲を受けたが、戦闘中のカレンが反応出来るわけもなく、気がつけば白兜はゼロと共に姿を消していた。

急いでガン・ルウを沈めてゼロの所に向かおうとするも、今度は駆けつけたコーネリアの部隊に囲まれていた。

これ以上長居をすれば、黒の騎士団は確実にやられてしまう。

ゼロは咄嗟に自分を置いて逃げるように指示を出した。勿論カレンは助けに行くと言ったが、直後通信は途絶え、決して少なくはない数のサザールランドの気配も間近に迫っていた。ゼロの事は気になつたが、もう迷っている余裕は無く、結局そのまま現場を脱出せざる得なかつた。

生々しく脳裏に甦る記憶。カレンは思わず携帯が音を立てるほど握り締めると、唇を強く噛んだ。

自分の不甲斐なさに今にも頭が爆発しそうだ。

『いカレン、おいつカレン、話聞いてんのかコラ！』

「えっ……?!」

再びの玉城の怒号にカレンの意識が引き戻される。いつの間にか考え込んでいたらしい。

「ごめん聞いてなかつた。で、どうなってるの？そっちは」

『つたく、どいつもこいつも…騎士団の方だけだよ、幹部はともかく、ゼロ死亡のニュースを鵜呑みにした団員の動揺が激しい。既にブリタニアの報復を恐れて脱退を申し入れてきているのが少なくないんだ。』

扇さんはそんな団員の説得に走り回っている『

「そっなの……」

慌てる団員達の気持ちも分らないわけではなかつた。

黒の騎士団はもう、ゼロがあつての組織だ。黒の騎士団そのものと言つても良い。それをいきなり失つて不安にならないはずがない。電話越しにも伝わってくる現場の切迫感。よく聴いてみると玉城も随分と疲れた声をしている。きっと彼も不眠不休で対処に追われていたのだろう。

なのに、自分ときたらルルーシュの事に気を取られてすっかり騎士団の事を忘れてしまつていた。

ルルーシュの事も心配だが、組織の事にもつと気を回すべきだったのだ。

「うん……こつ言う時だからこそこれ以上戦力が減るのは困るよね

……昨日の戦闘ではこっちにも随分被害が出ちゃったし」

『だからお前も早くこっちに来い。それで……いつ頃こっちに来れそうなんだ？』

「そうね、じゃあ今からでも……」

切羽詰まった騎士団の様子に、今からでも行く。と言い掛けて不意に口籠る。

『ん？どうしたんだ？』

急に言葉を切ったカレンを怪訝に思った玉城が訊ねてくる。

安否不明のゼロと崩壊寸前の黒の騎士団。確かにカレンとしても最優先にしなくてはいけない事柄ではあったが、ルルーシユの事も心配でたまらない。

「ちよつと待って……」

どうしよう。今すぐにもでも駆けつけたい……だけど……

ゼロは捕まっているとしても立場が立場なだけにすぐには殺されないだろう。

彼の利用価値はぶり他ニアが一番よく知っているはずだ。

ゼロの死など、カレンは毛頭信じる気は無い。

かたやルルーシユは民間人。テロリストの残党に囚われているとすれば、気まぐれに殺される可能性は彼の方がずっと高い。

ゼロとルルーシユ、二人の最悪の事態が脳裏にちらつき、焦燥ばかりが募って迷いに心を揺らす。

そして、薄れる事無く繰り返し脳裏に残るミレイの言葉。

ルルーシユ？誰それ？

色々と考えた末、カレンは断腸の思いで玉城に謝った。

「ホントごめん。なるべく早く行くから、もう少し待っていてくれる？」

もう少しルルーシユの事を調べてみよう。

このまま基地に行けば、現状で手一杯になるのは確実。それ以外の事には気を回す事さえ難しくなる。

こんな不安な気持ちのまま学園を離れるのは、カレンとしても避

けたいし、嫌だった。

『えっ、何だつて?!こつちの話をどう言う風に聞いてたんだよ!あっ…おい、てめっ…』

慌てる玉城の言葉を断ち切るように終話ボタンを押し、カレンは再び教室へと走った。

急いで教室に戻るも、着いた頃には授業が始まっていた。

出席確認の時から居ればルルーシュの手がかりを掴めたかもしれない。なかつたのに、とても惜しい事をしたと思う。

それからはどんな小さなことでも見逃すまいと教室の動きに注意を払っていたが、名前の一つも聞こえてくることは無かつた。

結局、この日はルルーシュが教室に現れる事無く、件の空気が冷めやらぬ学校はホームルームだけを行なって昼前には放校となつた。急速に人気が失われて行く教室。カレンは席に座つたまま不安げに埋まる事のなかつた彼の席を横目に見詰めた。

彼が居ない以外普段と変わらない日常。

確かにルルーシュが学校に現れない事などしょっちゅうだったが、そんな行動のミステリアスさに想像を掻き立てられたクラスメイト達がその分噂を囁くので、彼の存在感が絶える事は殆ど無かつた。

そんな状態慣れきっていたカレンにとって、今の状態は異様でしかない。

「あら、カレンさんまだいらっしやつたのですか?」

今朝廊下で声を掛けてきてくれた彼女が立ち止まって駆け寄ってくる。

彼女は体が弱いと言う設定のカレンを何かと気に掛けてくれる。きつとまた自分が席でじつとしているのを心配して足を止めてくれたのだろう。

「ええ、ちよつと考え事して……」

「そつ……」

少しホツとした様子の彼女にカレンは罪悪感を否めない。

任務のためとは言え、こんなに優しいクラスメイト達を騙しているのかと思うと本当に申し訳なくてたまらなかった。

彼女の慈愛に満ちた眼差しから逃れるように視線を逸らしてハツとする。

そうだ、ルルーシユの事を尋ねてみよう。

「ル……、ううん、そう言えばあの席……」

「え、どの席？」

「窓際の席。“今日”は何で空いてるのかしらね？」

わざとぼかして訊ねてみる。認めたくは無いが、確信に近い予感が、彼の名前を出す事を怯ませた。

「あの席……？」

カレンに促されるように彼女はルルーシユの席を眺める。カレンは祈った。

ルルーシユの席だと笑って答えてほしい。

しかし、そんなカレンのささやかな願いは叶わなかった。

「……そう言えばそうですね。何でかしら？というか、誰の席でしたっけ？」

“誰の席でしたっけ？”

彼女の言葉に最悪の予感が的中したことを確信し、目の前が暗くなる。

やっぱりそうだ……みんなの記憶からルルーシユが消えている。

首を傾げながらも屈託の無く答える彼女の様子には、ミレイ同様冗談や悪意は見られなかった。

最初はミレイもふざけているものかと思ったが、ここまでくるとカレンもある程度は現実を認めるしかない。

「そう……何故でしょうね……私も、わからないの……」
また否定されるのが怖くてカレンは言葉を濁した。

ルルーシユが居ない。

その存在ごと消えてしまった。

でも、何故私だけ憶えているのだろうか？

突きつけられた不可解な現象に眩暈にも似た感覚を覚えながら、ふとシャーリーの姿も見えていない事も思い出す。

彼女なら、誰よりも彼を愛する彼女なら…自分が望む回答をもたらしてくれるような気がするのにな。

調べたらシャーリーはちゃんと欠席届が出ていた。

理由はわからない。

ルームメイトのソフィによれば、朝には姿が無かったそう。

こんな時に一体何をしているのだろうか？肝心な時にいつも居ないんだから…

だけど、ルルーシュの存在が不確かな今、彼女の存在が確認出来ただけでも良かったとも思っていた。

色んな事がありすぎたせいか、カレンはイライラをぶつけるように生徒会室の扉を少し乱暴に開いた。

「ブおふおッ」

「ん？」

突如開かれた扉に驚いたリヴァルがカップラーメンを抱えたまま、会議用テーブルに足を載せた状態でむせていた。

一人きりだったらしく油断していたのだろう。慌てて姿勢を治すと、ぎこちない笑いをカレンに向けた。

「や、やあカレン。もしかして会長も一緒だった…り…り…？」

「……そんな事より、ルルーシュから連絡あった？」

リヴァルを見た瞬間、咄嗟に言葉が口を突いていた。

偶々生徒会室にリヴァルが居ただけだったが、ルルーシュと親しい彼が知らないなんて言うはずが無いと思ったのだ。

と言うか願いだっただ。

ミレイの事はもうしょうがない。だけど、リヴァルなら…

「へ？」

てつきり無作法を咎められると身構えていたリヴァルは唐突に投げかけられた質問に、暫くポカンとしていたものの、戸惑いがちにカレンに訊ね返した。

「えっと……ルル……シユ？」

「そうよ」

お願い、知ってるって言って……！

祈る想いでカレンはリヴァルの答えを待った。

だが。

「誰だっけ？」

そう言っただけ戸惑いがちに苦笑するリヴァルに愕然とするカレン。

リヴァルの記憶からもルルーシユが消えている。

一体、何が起きているの？

今朝のミレイとのやりとりや教室の事もあったので、混乱しているものの、最初受けたようなシヨックは無かった。しかし、一人不安と苛立ちが最高潮に達していたカレンは思い余ってリヴァルに当たってしまった。

「誰だっけ？　へえー誰だっけて？　……よく言うわよ。いつも

べったり一緒に居る癖して！　夕べだってあんなに顔を青くして探し回っていたじゃないの！」

「一体何の話だよ……俺、事件の後はまっすぐ家に帰ってたんだぜ？」
突然切れたカレンに怪訝な様子のリヴァル。カレンもまずいと思っただけもう止まらなかった。

昨日まで存在していた人間の痕跡がこれほどまで見事に消され、自分一人取り残されるように憶えていると言う現状はカレンからいつもの冷静さをすっかり奪ってしまったのだ。

「嘘よ！　だっておかしいじゃない。いつもサイドカーに乗せて連れ回していたくせに！」

記憶が消えたただけではなく修正までされているのか。

どっちの方が？　自分の方がとは思いたくは無かった。

「嘘って言われても……ってか俺がサイドカーにそいつを乗せてた

って？」

何を言っても記憶の無いリヴァルにとっては言い掛かりにしか感じていないのだろう。

リヴァルは困ったように頭を掻くと、カレンとの対話を諦めてその場を立ち去ろうとする。

「ちよつと、逃げないでよ……っ」

視線を逸らすリヴァルにカレンは思わず腕を伸ばすも、伸ばされた腕は空中で何者かの手に捕らわれて届く事は無かった。

驚いて振り向くと、厳しい眼差しを湛えたまま微笑むミレイがカレンの背後に立っていた。

「あら、リヴァルのサイドカーは私の指定席だったと思ってたけど、他にも人が乗っていたなんて知らなかったわ。その話、詳しく聞かせてもらえるかしら……ねえ？」

「か、会長……」

カレンは咄嗟に自分の腕を掴む手を振り払うと、素早くミレイから距離を取る。

ミレイの後ろではニーナが不安げに事の成り行きを見守っている。

「ミレイ会長……！カレンさん、何かあったんですか？」

救世主が来たと言わんばかりに駆け寄るリヴァルに、ミレイは労るよちに微笑んだ。

「大丈夫？それにしても……カレンはまだこんな事やってたの？しよ
うがない子ね」

「っ……！」

“こんな事”と言われて思わずミレイを睨むも、言葉は飲み込む力
レン。

彼女とは一度平行線を辿っているのだ。ルルーシユの存在を示す
証拠もない以上、ここでまた口論したところで自分が不利になるだ
けだ。

気まずそうに視線を逸らすカレンをミレイは怒りと言うより呆れ
た様子で一瞥すると、冷たく言い放った。

「探してるのが恋人かペットか良く知らないけど、あんまり揉め事起こすようだと私にも考えがあるわよ。さあ行きましょ。今日はまだ軍の作業があるから、生徒は速やかに下校しなきゃいけないのよ」
ミレイはリヴァルとニーナの腕を引くと、項垂れるカレンから踵を返した。

カレンが気になるのか、ニーナが腕を引かれながら振り返ってしきりにミレイとカレンを見比べている。

やっぱり、おかしいのは自分の方なのだろうか？

扉の向こうに消え行く背中の中に心の中で問う。

どうして？どうしてなの？尽きる事無く湧き上がる苦い疑問符。

誰でも良いから私の記憶を証明して欲しい。

三人が扉の向こうに消える寸前、ミレイは不意に足を止めて振り返り向いた。

もしかして、「今までののは全部冗談」と三人揃って笑ってはくれないかとここまで来ても僅かな希望を抱いてしまう。

だが、そんな奇跡が起こるはずも無く……

「そうそう、一応生徒名簿でルルーシュ君の事調べてみたけど、似た名前一つ無かったから。

居たとしても何か騙されてるんだわ。だからもう、さっさと諦めたほうが有益よ？」

ミレイはトドメを差すようにカレンにそう言うと、最後に「じゃあね」一言。そのまま振り向きもせず、扉の向こうへと消えていった。

閉ざされてしまった扉はまるで彼等の心のようにも思えて、カレンは溢れる涙を抑えられなかった。

カレンは失意のまま学校を後にすると、真っ直ぐ黒の騎士団基地へ向かった。

ルルーシュの事で駆けずり回っていたのでみんなを随分と待たせてしまった。少しでも遅れを取り戻さないと。

黒の騎士団幹部が集う、ゼロの執務室の入口の前まで来ていったん歩みを止めると、カレンはおもむろに両手でそつと顔を覆った。顔を洗ったりして瞼のむくみや涙の跡はほとんど消えたと思うけど、大丈夫かな。こんな大変な時に泣き顔なんか見せて余分な心配をさせたくはない。

心の中でしばらく素数を数えて気持ちを落ち着けると、カレンは元気良く部屋へと踏み込んだ。

「みんなお待ちせ！」

「お帰りなさい、カレンちゃん」

床に座ったままぐったりと壁に身体を預けていた井上が疲れた笑みでカレンを出迎える。

ハツとして部屋を見回すと、あちこちに疲れきった表情のメンバー達が死屍累々と散っていた。

その様子だけでカレンの居ない間の壮絶さが窺い知れるようだった。

「あつ、カレン！遅っせーんだよ！待たせすぎなんだよこの馬鹿！」
ソファの上で伸びていた玉城がカレンの姿を見るやいなや飛び起きて詰め寄ってくる。

いきなり馬鹿呼ばわりされて少しカチンと来たものの、大変な時に連絡が取れなかったり、電話を話の途中で袖にしまっていった手前カレンは何も言えず、平謝りのカレン。

「ゴメン！ほんつとゴメン！さつきもどうしようもなくして！」

「どうしようもなかったじゃねえよ。あれからも俺達は……」

「玉城、もうそれくらいにしてやれよ。カレンも学園が襲われた直後だったし、今はもうこうやって来てくれてるんだ。これからの事を考えよう……」

一度愚痴のスイッチが入ると止まらなくなる玉城を、ゼロのデスクの横で休んでいた扇が慌てて止めに入った。

「扇さん！遅れてごめんなさい。大丈夫ですか？」

短い間にすっかり疲れきってやつれた様子の扇。カレンが駆け寄

ると、どこかホツとしたように微笑んだ。

「大丈夫だ。それより学園の方は大丈夫か？」

何気無しに訊ねられて口籠るカレン。学園の事を思うと、どうしてもルルーシユの事を思い出さざる得ない。

カレンは思わずまた泣きそうになるのを堪えると、笑って誤魔化す。

「でもさ、扇……」

カレンの事でまだ納得いかないのか、扇に食い下がる玉城。

負い目がある分大人しくしていたカレンもいい加減頭に来て玉城に掴みかかろうとするも、井上が二人の間に割って入った。

「ハイハイおしまい。玉城も素直じゃないんだから。カレンちゃん勘弁してあげてね。玉城ったらカレンちゃんと連絡取れない間ずっとカレンちゃんの事心配してたんだから」

「へ？」

「井上！ナニ勝手な事言っただよ！何で俺がコイツの心配なんかしなきゃなんねーんだよ」

井上の言葉に耳まで真っ赤に染めて切れる玉城。カレンもその様子にすっかり殺気を削がれてポカンとした様子で玉城の顔を見詰めると、キツイ顔で睨み返されてしまった。

「ホントの事じゃないの。“アイツは肝心なトコが抜けてるくせに無茶するから変なトラブルに巻き込まれたんじゃないか”ってずっとブツブツ言っただじゃないの」

「そ、そのドコが心配なんだよ。ホントの事じゃねーか」

「十分心配してんじゃない。玉城も素直じゃねーな」

「全くだ」

「杉山あ！南も同意してんじゃないよー！」

「あっはははははは。そろそろ勘弁してやれ。そうじゃないと玉城がいつまでも素直になれないだろう」

「扇さんまで~~~~~!!」

すっかりみんなに弄りまわされ、音を上げる玉城。

普段、表現がぶつきらぼうな分、意外な一面を見つけると弄りたくなるものである。

カレンも最初は突つかかれて頭に來たが、心配されていたと判ると悪い気はしなかった。

「あははははは！おつかしい！」

真つ赤になつて照れる玉城を見ている内に妙なおかしさが込み上げ、カレンはみんなに釣られて堪らず笑い声を上げた。

「何だよ……」

カレンにまで笑われてバツが悪そうな玉城。

そんな照れた顔のまま見つめられては、今度はカレンまで照れくさくなつてしまう。

「まあ……その、何て言うか、……ありがと。心配してくれて」

「……フン」

素直に礼を言われ、照れくさそうにカレンから顔を背ける玉城。

その仕草が何だか可愛くて、カレンが拗ねる玉城をニヤニヤ見詰めていると、不意に部屋の戸が開いてピザの箱を抱えた吉田が入つて來た。

「おーい。ピザ届いたぞ〜」

「あ、吉田さん。お疲れ様です」

「俺のアパートから頼んだから少し冷めてるけど……って來たかカレン。お前が居ない間大変だったんだぞー。主に玉城がうるさくて」
「その話題はもういいー！ー！ー！ー！」

また話を蒸し返されて憤慨する玉城。ドツと爆笑の渦が巻き起こり、事情を知らない吉田だけがきよとんとしていた。。

「なあカレン。何があつたんだ？」

「さあ、何だろ？」

流石に玉城が可哀想なのでこれ以上は黙っていて上げる事にした。気が付けば來た時に感じた疲れた空気は消えていた。

みんな、今は何となく普段通りにはしゃいでいるが、本当は不安に押しつぶされてしまいそうはずだ。

ゼロとは連絡は取れず、組織も崩壊寸前。

ブリタニア軍にいつ襲撃されてもおかしくない。

だからこそなのだろう。こんな時だから普通でありたいのだ。

諦める方がずっと楽なのに、誰一人としてそれを口にはしない。

きつと漠然と感じているのかもしれない。

誰かがそれを口にした時が最後なのだ。

そして……そんな最後も、誰も望んではない。

私達には果さなければならぬ目的があるのだ。

平和な日本をブリタニアから奪還すると言う目的が。

それを達成するまではどんなに苦しくても諦める訳にはいかない。

ゼロは私たちに未来を勝ち取る希望をくれた。今度は私達がゼロを助けに行く番なのだ。

ゼロはきつとどこかで私達の助けを待っているはず。

そうよ、ゼロが死ぬはずなんか無いのよ。

ゼロは一緒に日本を取り戻そうって言ってくれた。

日本を取り戻す前に死ぬはずなんか、無い……

だが、そんなカレンや黒の騎士団メンバーの願いも虚しく、ゼロの消息は一向につかめず、連絡が入る気配すらなかった。

そして、ゼロ死亡の報道が流れてから3日後……

日本人の心を更に打ち砕くような絶望的なニュースがもたらされた。

ナリタ連山に本拠地を置く、日本奪還の要と名高い『日本解放戦線』がブリタニア軍に襲撃され、壊滅した。

誰もがそのニュースに耳を疑ったが、残念な事に現実だった。

今度こそ、その絶望を認めない訳にはいかなかった。

その情報をいち早く黒の騎士団にもたらしたのは、戦場を命辛々逃げ延びた日本解放戦線の兵士だった。

「藤堂さんは一体どうされたのですか？」

包帯にまみれたボロボロの状態の兵士に、堪らず詰め寄る扇。

日本解放戦線には、7年前の戦闘で唯一ブリタニアに泥をつけた『敵島の奇跡』を起こした『奇跡の藤堂』が居たはずだ。

藤堂の力を持ってしても壊滅は避けられなかったと言うのか。

「藤堂さんは……藤堂さんと『四聖剣』の方々は……キョウトにナイトメアを受け取りに行つてたんで……おらへんかったんや……」

「そうですか……」

「ワシ等が弱いから……片瀬少将を護れんかった……チキシヨウ……畜生、うつつうつつ……！」

悔し涙を流す兵士と堪らず俯く扇。

他のメンバーも痛ましげに唇を噛んでいた。

聞けばブリタニア軍の兵力は日本解放戦線のゆうに三倍を超えていたと言う。

藤堂とその直属部隊である『四聖剣』が居た所で焼け石に水だったのかもしれない。

寧ろ、これからの事を思えば居なかつたのは不幸中かもしれない。つた。

もちろん、そんな事をこの兵士の前で口には出来るはずがないが……。これでまた……日本独立が困難になったわけだな……」

沈鬱な表情でそう呟く杉山にカレンは堪らず噛み付く。

「何言つてるんですか！そんな訳無いじゃないですか。日本はまだいけます！」

「はあ？の！お前何言つてんだよ！今の話聞いてなかつたのか？日本解放戦線がやられちまつたんだぞ？！キョウト力すら及ばなかつたんだぞ？！そんな状態でどうするって言つんだよ！」

根拠があるとは思えない強気なカレンの発言に切れる玉城。

「私達のゼロが居るじゃない！」

カレンの発言に沈黙する一同。その中、井上が堪らず泣き崩れた。「うつつ……ああああ……！」

「井上さん、何で泣いてるんですか。まさか、ゼロが死んだなんて思ってるんじゃない……」

泣き崩れた井上を不思議そうに眺めるカレン。

「カレン……」

「扇さん……扇さんは違いますよね？ゼロが死んだなんて、思っ
てませんかよね……？」

「それは……、……っ！」

カレンの切羽詰った眼差しが真っ直ぐと扇を捕らえる。

耐え切れず視線を逸らす扇。

扇も最初は微かな希望を捨てずにゼロ生存の可能性を信じていた
が、結局連絡一つ取れず、その内に解放戦線壊滅のニュース。
こうなると認めるしかなかった。ゼロは……もう居ないと。

だが、カレンの気持ちを思うと、それをはっきりと言葉にする事
は出来なかった。

視線を合わそうとしない扇に、カレンが縋る。

「ゼロが死ぬはず、な……」

「死んだんだよ！」

カレンの言葉を遮って玉城が叫んだ。

「玉城！」

物分りが悪いカレンに切れた玉城の行動に一同が青ざめる。

玉城がカレンに掴みかかると、既にそのサファイアの瞳は絶望の
涙を滲ませていた。思わず息を呑む玉城。

カレンとて何も分っていない訳ではなかったのだ。

ゼロが示した決して小さくは無い希望は、まだまだ幼いカレンの
心を現実を直視する事から遠ざけていた。

慌てて南が二人を剥がそうとするも、玉城はそれを眼で牽制する。

「玉城……」

いつに無く真剣な玉城の眼差しに南は引き下がるしかなかった。

カレン、もう認める。ゼロは……死んだんだ」

玉城はカレンの肩を掴んで真っ直ぐ見詰めると、言い聞かせるよ
うにもう一度言った。

「玉城……何言って……そんなはず……」

「あるんだよ……いいから認めるよ！あれからゼロの連絡があったか？無かったら？！　ゼロは死んだ……ブリタニアに殺されたんだ！」

「違う！　ゼロはブリタニアなんかにはやられるもんか！　離して！」

「違う！　認める。ゼロは死んだんだ！」

「た……」

繰り返し突きつけられる事実にかレンは堪らず自分を戒める手から逃れようと身を擦るも、自分を見つめる玉城の眼差しが今にも泣きそうな事に気が付いて固まる。

（あの玉城が、こんな苦しげな顔をするなんて……）

ゼロは殺された…死んだんだ。

玉城の言葉が頭の中で繰り返され、未だ嗚咽を漏らし続ける井上の泣き声がかレンの不安を増長してゆく。

「カレン……少なくとも、ゼロはこの場に居ないんだ……これからをどうするかが重要だと思うんだ。俺は……」

不意に扇から声を掛けられ、振り返るカレン。

「扇さん……」

カレンの気持ちを気遣ったの事だろう。扇ははっきりとは言わなかったが、良く解った。

扇はもう、諦めている。

そしてようやくカレンも、認めざる得ない事を悟った。

（ゼロはもう居ない）

シヨックの余りカレンの体から力が抜けてゆく。

生きる希望になりつつあったゼロの喪失に、視界が　世界が暗くなる。

「カレン！」

傾ぐカレンの身体を玉城が支え、悲愴な表情で抱きしめる。

日本を取り戻そう。

ゼロの言葉が脳裏に甦るも、すぐに闇の中に滲んで消えてしまう。

そう強く語った彼はもう居ないのだ。
もういない。

希望だったモノが消えない傷跡に変わってゆく。
私達はこれからどうすればいいの？

ねえ、誰か……。

誰か 誰か教えて…お願いだから お兄ちゃん！

時は少し戻り、未だ薄暗い早朝。シャーリ・フェネットは父に会うためにナリタを訪れていた。

お父さんの所に行けば、もっと詳しい情報がわかるかもしれない。
ルルーシユの消息に関する何かが、軍の情報網になら引つかかっているような気がする。

そんな僅かな希望を抱いて駅の改札をくぐると、彼女の到着を待ち構えていた父親がシャーリーに駆け寄ってきた。

「シャーリ！ 真夜中にこっちに来たいなんて言い出すからビックリしたよ。大丈夫かい？」

「お父さん！」

シャーリ は父の姿を見るなりその大きな胸に飛び込んだ。

「よしよし。何か不安な事があったんだね。一体、何があったんだい？」

彼は飛び込んできた愛娘の身体を抱きしめると、シャーリーの前髪を柔らかに掻き上げ、隠れていた顔を愛しそくに覗き込んだ。

「あのね、実は私のクラスメイトの……」

状況を説明しようとするも、父の身体についていた通信機が緊急入電を告げたため、シャーリの言葉は遮られてしまった。

「ちよつと待ってくれ…どうした。え？ 今から緊急報道番組が始まるから見ろって？ちよつとまってくれ。今テレビを出すから」

「どうしたの？」

慌てたように携帯テレビを取り出す父を怪訝な表情で眺めるシャーリ。

「いやあ。これから大変なニュースが流れるんだ。お前も良く見ておきなさい。お前の学校も出てくるはずだから」

「え？アツシユフオード学園が？」

きつと昨日のニュースの事だろう。

ルルーシユの事を思い出して息を呑む。

テレビにスイッチが入り、微かなザツピングの後、ニュースキャスターが画面に映った。

『さ……先程のアツシユフオード学園事件の続報です』

案の定、昨日の事件のことだった。

まさか死亡者が確認されたとかそう言うニュースじゃないでしょうね？

ルルーシユの死など報道された日には、多分私は生きて行けない。心なしに落ち着きの無いニュースキャスターの様子に妙な不安がシャーリ の胸に過ぎる。

だが、それも杞憂に終わる。

キャスターの口から出てきたのは別の人間の死を告げるニュースだった。

『昨日コーネリア総督率いるテロ対策部隊が『紅の月』とは別に『黒の騎士団』と交戦した際、『黒の騎士団』リーダー“ゼロ”の首級を上げたとの報告が上がってきました！

繰り返します。『黒の騎士団』の“ゼロ”の首級が上がりました！

ニュースはこのまま特別放送番組となります！』

「え、ゼロ……死んだ……？」

思わず報道を食い入るように見るシャーリ。脳内に、ゼロの死を告げるニュースがこだまする。

そのニュースにシャーリ は大切な事を思い出しそうになるが、直ぐに何もわからなくなった。

「昨日のアツシユフオード事件の時だよ」

「うん……」

ぼうつとしたままテレビ画面を見詰めるシャーリ。

「シャーリ？」

父に呼ばれてハッとすると、シャーリは驚きの声を上げた。

「え？ああ…凄いビックリよね！ゼロ、死んじゃったんだ」

「ああ、これで世の中も少しは平和になるね。ところで、何の用だっけ？」

「え？」

ここに来た理由を改めて訊ねられ、シャーリは父の茶色い瞳をきよとんと見上げた。

それから暫し考え込んで言った。

「何だっけ？」

無邪気に父を見詰めるそのペリドットの瞳には、さっきまで占めていた不安の欠片も見られなかった。

第一話（後書き）

分割分に続きます。

第一話(2)(前書き)

分割分。

第一話(2)

「まあ、ギアスに飲み込まれるよりは楽に死ねたかもしれないな」
C・Cは抑揚の無い声でそう呟きながら部屋のフローリングに腰を下すと、天井を仰いで彼女以外には聞こえない声に耳を傾ける。
「解ってる。ちゃんと全てを無かった事にするから、お前もそう騒ぎ立てるな」

呟きと共に床に身体を横たえると、若木色の長い髪の毛が幾つもの緩やかなカーブを描き、白い拘束衣に付いている金具が微かに硬質な音を立てた。

ここは“ルルーシユの部屋”だったクラブハウスの一角。
すっかりと片づけられたこの部屋には、住人が居た痕跡どころか居た事を憶えている者すらもう誰も居ない。

何故ならば、それがルルーシユの望みだったから。
いや、正確には望みが叶わなかったからこそ、彼は「無」を望んだのだ。

手に入らないのならば全て無くなってしまえばいいなんて、本当に両極端で自己中心的だ。

だが、それはとても彼らしい考え方だと思う。
残される者の痛みを知っている。彼なりの優しさ。
本当に、どこまでも不器用な男だ……。

温もりを吸い取るばかりの固く冷たい床の感触は、まだこの手に残る彼の消え行く体温を思わせ、思わず床に這わせた自分の白く小さな手を眺めた。

彼ならば、今度こそ私の願いを叶えてくれそうな気がしたのに。

ふとそんな事を思った。

ずっと見守ってきたせいで情が移った？

冗談。私らしくもない。

そんな期待を抱かせた者は過去にも沢山居たし、失うのも初めてではない。

また、一から出直しになっただけの事。

永遠に近い時を持つ自分にとって次の契約者を探す時間など、ほんの僅かなものに過ぎない。

だけど　そう強く自分に言い聞かせても決して慣れる事が無い深い喪失感が心を摩り減らしてゆく。

これを何度味わえば私のささやかな願いは叶えられると言うのだろうか？

「それにしても、お前は何処までも手間を掛けさせる奴だな。アフターサービスの約束なんて無かったはずなのに……全く、私も人が良い。なあ？　感謝しろよ……ルルーシュ……」

普段殆ど変化の見られる事の無い彼女の表情が淋しげな笑みの形に歪んだ。

* * *

気が付くとカレンは自室のベッドに横たわっていた。

あれ？　確か私は扇さんに一旦家に帰れって言われて……家の玄関まで来て……。

「うつ……」

朦朧とする意識の中、軽い頭痛に襲われてうめいた。妙に頭が重く、靄がかかっている。

だが、段々意識がはっきりし、少しずつ自分の身に起こった事を思い出してくる。

「あ……思い出した……！」

（帰ってきたらあの女が玄関に居て……うちの黒服達に捕まって……薬のような物を嗅がされて動けなくなつて……そうだ、精神鑑定を受

けたんだ)

精神科医がカウンセラーみたいなのに色々訊ねられた事をおぼろげに憶えている。

隙を突かれたとはいえ、抵抗一つ出来なかった事が悔しくてたまらない。

多分、ミレイ会長が私の事を家に連絡したのだろう。

生徒会室から逃げ出してそのまま基地に何日も詰めて家にも帰らなかったし、おかしくなったと思われてもしょうがない。だが納得は出来ず、裏切られたような気持ちにカレンは奥歯を軋ませた。

断片的に残る記憶を手繰り、催眠誘導に乗せられて黒の騎士団について漏らしてないか確認する。

大丈夫…何とか堪えてる。多分…。

記憶が曖昧な分不安は拭いきれないが、こうやって自室に寝かされてる以上まずい事は無かったと思うしかない。

ルルーシユの事は喋っちゃったみたいだけど……

これは尋ねられるがまま答えてしまったようで、それに伴って今までの苦いやりとりが脳裏に甦り、それこそ頭がおかしくなりそうな後悔とも羞恥ともつかないぐちゃぐちゃしたものが湧き上がってきては、脳みそをかきむしりたい衝動に駆られてのたうちまわりそうになる。

裏で私がおかしくなったと笑われているのかと思うと無償に腹が立ってくる。

「チクシヨウ！」

苛立ちに任せて手元にあった羽枕を乱暴に入り口の扉に向かって投げつけた。

「キャ……」

不意に扉から悲鳴が上がり、カレンは驚きと共に、瞬時に血の気が引くのを感じた。

非常に良く聞きなれた声。だけど顔を確認するのが怖い。

(み……見られた……?)

「あーびっくりした。急に枕が飛んでくるんだもん。カレンも枕投げたくなることあるのね。大丈夫？」

びっくりしたと言う割に落ち着いた仕草でカレンのベッドに腰掛けると、拾って来た枕をカレンに手渡す。

カレンは申し訳なさ気に枕を受け取ると、気まずげにシャーリーを見詰め返した。

「シャ、シャーリー……う、うん……ごめん。気分が悪くて……つい……」

何てタイミングが悪いんだろう。よりによってシャーリーに見られるなんて。

顔は微笑みを絶やさぬままそつと視線を逸らす。

隠していた一面を見られた気恥ずかしさと、病弱の演技がばれてないらしい安心感と嘘を吐き続けている後ろめたさでシャーリーと視線を合わす事が出来ない。

「体、大丈夫？ 風邪でずっと休んでたみたいだから心配してたけど……」

どうやら例によって家はカレンを病欠と言う事にしておいたようだった。

名門シュタットフェルト家の令嬢が無断外泊で度々行方不明だなんて、世間には口が裂けても言えまい。

こう言う時、病弱設定は本当都合が良いと思う。

「もう、大分良くなったわ」

「そうなんだ。良かった」

「……ところで私、どのくらい寝ていたのかしら？ 起きたのはさっきなの」

「そうなの。うーん、カレンが最後に学校来たのは事件の翌日らしいから、一週間くらいかしら」

「一週間……？」

事件から一週間？ 基地に詰めていたのが3日……4日くらいだったかしら……それから帰ってきて捕まって……嘘……そんなに寝

ていたの?!

カレンは愕然とした。本当なら着替えを持ってまた基地に行くつもりだったのに3日も寝込んでいたなんて。

きつと外を出歩かないように自白剤の他に鎮静薬でも盛られたの
だろう。

(あの糞野郎どもが~~~~!!)

怒りを思わず表情に出してしまったらしく、シャーリーが不安気に眉を顰めた。

慌てて表情を笑みに戻しつつ、黒の騎士団に思いを馳せる。

捕まったとは言えただでも大変な時に私が居ないなんて、扇さん
…困ってるだろうな。

遅れた分今すぐにも行きかけたが、今はシャーリーもいるし、
義母が今のカレンを外に出すとは思えなかった。

ほんつとタイミング悪いわ。

何とか基地に行かなくちゃ……でもどうやって?

「どうしたの? さっきから唸ったり笑ったり。苦しいの?」

「ふえっ?! だ、大丈夫! ……よ?」

急に声を掛けられてますます拳動不審なカレン。

焦りを誤魔化そうとする余り、百面相になっていたらしい。

「何で疑問系なのよ。あはは」

うるたえるカレンに苦笑するシャーリー。

何とか誤魔化したものの、冷や汗が止まらなかった。

「そっそう言えば今何時? 学校……もう終わったの?」

「うん。これからよ。カレンが大丈夫そうなら一緒に行こうと思
って」

本当にカレンが調子が悪いと信じているのか、シャーリーは気遣
うように微笑む。

「ホント!？」

しめた。まずは家から出られる!

「うん。どう? 行けそう?」

「もちろん行けるわよ！今準備するから玄関で待つてて」

学校に着いたら適当なところで抜け出そう。基地にさえ行ければみんなに何を言われようと知ったこっちゃない。そう心に決めるとカレンは急いでベッド抜け出してシャーリーを部屋から押し出そうとする。

こんな扱いをして申し訳無いかとは思うが、しばらく基地に詰めるための準備をするのでシャーリーに支度するところを見られる訳にはいかないのだ。

「えっ？う、うんわかったわ…」

シャーリーは戸惑いながらも言われるまま部屋を後にした。

扉を閉めるのと、カレンは表情を曇らせて祈った。

「お願いだから、みんな無事でいて…」

それだけが願いだっただけだ。

* * *

一方、枢木スザクは軍内で一躍有名人となっていた。

スザクは先日、『アッシュフォード事件』において、何とあの、史上最悪のテロリスト集団と名高い黒の騎士団リーダー『ゼロ』を仕留めた英雄として。

ただ、仕留めたのがスザクというのは一般的には公表されず、一般的にはブリタニア軍がゼロを倒した事にはなっているが。

イレブン出身の名誉ブリタニア人であるスザクが成した行いは軍内を嘩然とさせたが、事実は事実。その偉業を誰もが認めざるを得なかった。

ブリタニア人は選民意識から来る差別意識こそ強いものの、一度能力を認めてしまえばちゃんと評価が出来る素直さも持ち合わせているので、スザクは行く先々で手放しの称賛を受けた。

時にはスザクが名誉ブリタニア人の上、未成年だと言うのに言い寄る女性までいた。

もちろん、丁重にお断りさせていただいたが……。

しかし、色々ともてはやされながらも肝心のスザク本人は自分の挙げた実績と受けている評価に余り実感が持てずにいた。

何故なら、スザクにはゼロを討ち取った瞬間の記憶が無かったのだ。

だから皆に、仕留めた時の事を詳しく聞かせてくれと言われても答える事も出来ず、笑って誤魔化す他なかった。

直前の記憶まではちゃんと残っている。

黒の騎士団の赤い機体とゼロの機体が学園を占拠していたテログループ『紅の月』のリーダーが駆るガン・ルウと戦闘しているところにランロットで割り込み、ゼロの機体を赤い機体から引き離したところまで憶えているのだが、次に気がついた時にはランロットの足元に転がるゼロの死体を茫然と眺めていた。

スザクはすぐにそれがゼロだとは認識できず、暫く地面に飛び散る何かを眺めていたが、瓦礫から伸びる黒い手足と辺りに散らばるナイトメアの残骸に気が付いてようやくそれが何なのかを理解した。さっきまで追っていたはずの敵の死体を目の前に、スザクは思わず息を呑み、戦慄く唇から漏れ出しそんな動揺を悲鳴ごと左手で覆った。

触れた頬には何故か、涙の伝った跡が残っていた。

何故？

（何故“俺”は泣いているんだ？）

判らない。分らない。解らない。

ただ頬は濡れている。

（ゼロを殺したのは誰だ？ 他に誰かここに居るのか？）

混乱しながら慌ててリーダーを確認するも味方の機影はずっと離れた場所で蠢くばかりで、ランロットの周りにはサザーランドどころか敵兵の一人も認識できなかった。

それもそうだろう。

誰にも邪魔をされず、ゼロを確実に仕留めるためにあえて人気の

無い場所に誘い込んだのだ。

そう言う命令だった。

だとすると、目の前に転がるゼロを殺したのは、スザク　自分以外考えられなかった。

その事実には愕然とするスザクの瞳に、醜悪なオブジェと化したゼロの姿がはつきりと映りこむ。

廃墟と化した学び舎に広がる凄惨な光景。ゼロはナイトメアから引きずり出され、念入りに頭を潰された状態で事切れていた。

モノクロの世界の中、血の色だけが鮮烈に浮かび上がり、スザクの瞼を焼いた。

(……………)

あれから一週間。新たな日常が、瞼に、脳裏に刻み込まれてしまった陰惨な記憶を押し流してくれまいかと期待していたが、未だ薄れる事無くスザクを苛んでいる。

そしてもう一つ、スザクの意識を侵食している不可解なモノがあった。

何故か解らないが、あの日から何をすることも深い喪失感が纏わり付いて離れないのだ。

(何かを忘れていたような気がする)

思い出せないけれど、とても大切な何かを無くしたような気がするのだ。

まるで大切な人を無くしたような…

(もしかしてゼロ?)

馬鹿な。確かに一度は命を助けてもらった事はあるが、ゼロに対して敵味方以上の感情はなかった…はず。

だが、妙に自信が持ちきれない自分に気が付いて戸惑う。

軍医にれば心理的なショックによる一時的な記憶喪失だろうという事だが、どんなに記憶を探ってもゼロとの間に記憶を失うほどの何かを見出す事は出来なかった。

ああ、もうこの事について考えるのは止めよう。

疲れている体が余計疲れるようだ。

スザクは答えの出ない煩悶を断ち切らんと頭を振ると、僅かな安寧を得るために自室に向かって研究棟の廊下を急いだ。

だが、自室の手前まで来てスザクはおもむろに歩みを止めると、驚きに眼を見開いた。

何故、彼女がこんな所に居るのだろうか？

ここに居るの無い姿が、扉を背にちよこんと座り込んでいた。

スザクは自分の眼を疑い、思わず目を擦ってみるが、目の前にある光景は変わらない。

見間違いかと思ったが、確かに“彼女”だ。

「ユーフェミア様!？」

彼女はスザクの気配に気が付くと、腰よりも長く伸びる赤みを帯びた桃色の髪を緩やかに波立たせながら立ち上り、大輪の花の如き笑みを咲かせてスザクを迎えた。

「スザク!お帰りなさい」

ユーフェミア・ヴィ・ブリタニア。神聖ブリタニア帝国の第三皇女にしてエリアー1の副総督を担っている。

本来なら尊い存在である彼女の行動には屈強な護衛が何人も同行するはずなのだが、今の彼女は一人だった。

奔放な性格を持つ彼女の事だ、また一人で勝手に政庁を抜け出してきたのだろう。

「お帰りなさい、じゃないですよ!またこんな危ない事をして。誰かに見られたりしたら…」

「あ、大丈夫ですよ。私に来る直前にロイドが人払いをしてくださいましたから」

不測の事態に慌てているスザクの様子に、ユーフェミアは不敵な笑みでそう付け加える。

「それでか!」

妙に静かだと思ったのだ。

夜遅いとは言え、研究所の都合上昼夜問わず常駐している研究員

と誰一人擦れ違わなかった。

きつと、ロイドがスザクに会いに来たユーフェミアのために独断で研究員や研究所のある大学の関係者の作業を中断させて帰してしまっただろう。

(怒ってるだろうな、セシルさん……)

彼女の心労を思うと、スザクの胃も痛んでくる気がした。

(それにしてもロイドさん……姫のわがまを聞くにしてもこんな所で一人にしておくなんていったい何を考えているんだろう?)

彼女に何かあったら一体どう言う風に責任を取るつもりだったんだ?

ああそうか。今頃はセシルさんから逃げているのか。

それ以前に何も考えてないのだろう。

不意打ちに近い展開に軽い頭痛と眩暈を覚えるスザク。

「何か、ありましたか?それとも矢張り、わたくしがここに来たのはご迷惑だったでしょうか…」

彼女も自分の無茶な行動に無自覚な訳ではないのだろう。閉口しているスザクの様子にユーフェミアは不安げに表情を曇らせた。

「いつ、いえ……そう言うわけでは……!」

正直なところ彼女の登場が嬉しくないはずはなかったが、スザクにも立場というものがある。

何せブリタニアの皇女が深夜総督府を抜け出した先が若い男性軍人の部屋、しかも相手は名誉ブリタニア人だった! ……なんて、もしこの事実が明るみに出ようものならとんでもない大事になってしまうのは確実だ。

スザク自身が何か言われる分には構わないのだが、自分と関わったためにユーフェミアの名に傷をつける事になったらスザクはもう生きてゆけない。お姫様には早々に帰っていただくこつ。

「と、とりあえず中に入ってください!」

ロイドが人払いをしたとは言っても何があるかわからないので、スザクは念のため辺りを見回しつつ急いでユーフェミアと共に自室

へと入り込んだ。

部屋に入って慌てて扉を閉めると、一気に疲れが身体の中から吹き出し、スザクは扉を閉めた形のまま縋るように扉に顔を埋めて大きく溜息をついた。

「大丈夫ですか……？」

鈴が如き愛らしい声に振り返ると、ユーフェミアが心配そうにスザクを見上げていた。

その純粹な眼差しに思わず状況を忘れて頬が緩んでしまいそうになり、スザクは慌てて顔を背けてしまう。

「いえ、ちよつと疲れが……」

唐突な展開に驚きはしたものの、ユーフェミアが危険を冒してまでスザクに逢いにきてくれたのだ。

嬉しくないはずがない。

そう思ったら沸きあがる喜びに自分の肩が震え、唇が笑みの形に釣り上り始めた。

こんな顔、恥ずかしくてユーフェミアに見られるわけにはいかない。何とか元に戻さないと。

そうは思いつつも不意打ちを食らった身体は思うように言う事は聞いてくれず、スザクは身悶えるばかりだ。

「お疲れですか？じゃあ、一緒にこれを頂きましょう！」

ユーフェミアは自分から顔を背けて振り向く気配の無いスザクの様子に痺れを切らすと、強引にその視界に回りこみ、両掌より少し大きい程度の小さな白い箱をスザクの顔に突きつけた。

「あつ、ちよ……少々お待ち下さいお姫様っ」

「姫ではありません。今はただのユーフェミアです。これ以上姫と呼ぶなら私は今から大きな声を出しますよ？」

「そ、それは……！」

そんな事されたらたら折角築き上げてきた立場どころか命さえも危うくなってしまう。

「さあ、ご覧になって下さい」

慌てるスザクの手に強引に箱が渡され、思わず面食らいながら箱と微笑む少女の顔を交互に眺める。促されるまま蓋を開けると、箱の中には小さいながらも精巧にデザインされた美しい色とりどりのケーキがぎっしりと詰っていた。

「これは…」

甘い香りがスザクの鼻腔をくすぐり、自分が空腹だった事を思い出す。

「うちの料理長に内緒で作っていただいたんですよ。料理長、スザクと同じ名誉ブリタニア人なんです。だから、スザクさんに宜しくって言っていました」

そう言って笑みを浮かべてスザクを見詰めるユーフェミア。

心なしかアメジストの瞳を彩る睫毛が震えている。緊張しているのか。

視界にちらつく薔薇色に染まった頬と桜色の唇にスザクの胸が高鳴る。

しばらく二人はそのまま見詰め合っていたが、スザクはついに緊張しきっていた表情を笑みの形に崩した。

「……全く、お姫様には敵いませんね。この部屋にはグリーン・テイしかないんですけど、良いですか？」

「やったあ！ グリーンテイですか？ 私、日本のお茶も大好きですからむしろ大歓迎ですよ！」

ようやく微笑んでくれたスザクに思わず歓声を上げるユーフェミアは。スザクはその声に驚いてケーキの箱を落としそうになっってしまう。

「「あっ！」」

慌てる二人。急いでスザクがケーキの箱を支えようと、ユーフェミアの手まで一緒に掴み上げてしまう。

スザクは急いで手を放し、気恥ずかしさにユーフェミアから背を向ける。

「す、すみません！」

「いえ、こちらこそ……っ！」

謝りながら、まだユーフェミアの感触が残る手をスザクはついつい眺めてしまう。

セシルさんとはまた違った柔らかさを持つ、華奢な手だった。

そつと横目にユーフェミアの様子を見ると、彼女も真つ赤な顔でケーキの箱を弄んでいる。

「お、お茶入れますね！」

その声に黙って頷く事しか出来ないユーフェミア。

スザクも何故か彼女の姿を直視できず、そのまま逃れるように茶器のある棚へと向かう。

触れた手が熱い。顔も熱い。

そして何より、心が熱かった。

(何でこんなに熱いんだろう?)

その熱さを説明しうる単語が脳裏に浮かびかけるのを慌てて打ち消すと、気恥ずかしさを誤魔化すように近くの棚に置いてあった湯呑み茶碗を掴んだ。

いつの間にかさつきまで頭の中を占めていた疑問も不安も、全て吹き飛んでいた。

* * *

日本解放戦線壊滅後の黒の騎士団は、惨澹たるものだった。

ゼロ失脚で、ただでさえ厳しい状況に追い込まれていた騎士団に畳み掛けるようにもたらされた日本最大にして最後の防衛戦と言われた組織壊滅のニュース。随分大きくなったとはいえまだ鳥号の集の域から出きっていないかった黒の騎士団のような新興組織にとって、その影響も壊滅的だった。

明日にでもブリタニアが攻め込んでくるのではないかという不安がメンバー内に蔓延し、3日も経たずに構成員数は三分の一を切った。

ゼロ死亡の時点では扇も組織を守るためにメンバー達の説得に回っていたものの、ナリタ陥落の情報を受けるといよいよ流出が抑えきれなくなり、出ていく者には“黒の騎士団の情報は漏らさない”と言う誓約を条件に諦める他なかった。

現時点で残っているのは、ゼロを神と崇め奉る狂信者か、逃げられないと悲観した敗北主義者ばかり。

人数もそうだが、これを戦力と言うには余りにも厳しいだろう。ナオトグループの頃から組織の一翼を担ってきたカレンとしては、兄の忘れ形見にも等しい組織が目に見えて崩壊してゆくのを見ていく事しかできないのが悔しくて堪らなかった。

「……レン、ちょっとカレンってば！」

「え……？」

シャーリーに呼ばれてハツとするカレン。

「学校に着いたわよ。それはそれとして、教室は花壇の方には無いんじゃない？」

言われて足元を見てみると、自分が歩こうとしている場所は昇降口から微妙にずれており、後一步で花壇に踏み込むところだった。

「あ、ごめーん！ぼうつとした。まだ頭に血が足りないみたい」
ええ、考える事が多すぎて本当に足りない気がするわ。

今ここで理由付けて帰ってしまおうか考えつつ、カレンは昇降口へと急いだ。

「カレンがぼうつしてるのはいつもの事じゃない。病み上がりなんだし、しょうがないわよ」

「う、うん……」

「あっもうこんな時間。急ぎましょ」

「ねえ……」

カレンの手を掴んで先を急ごうとするも、不意に声を掛けられて立ち止まるシャーリー。

「なあに？」

「事件の次の日シャーリーはどうして学校を休んだの？」

こつやって目の前に彼女が存在してるのはわかっていても、ずつと気になってきた疑問を確認せずにはいられないカレン。

もしかしてルルーシュを捜していたのだろうか？

彼女なら当ても無いのに厳戒令を破って探し回るくらいの事はし
かねない。

でも今は……憶えては居ないだろう。

あの日の事どころか、今までの事も。

確信はある。『ルルーシュ命！』と言ってはばかりない彼女がカレンと顔を合わせてからまだ一度もルルーシュの名前一つすら口に
してはいない。

シャーリーはカレンの質問に暫し思考すると、思い出したように
言った。

「ああ！あの日。お父さんの所に行ってたの」

「え、どうして？」

「わかんない。気が付いたらお父さんの所に居たのよ」
その理由に別段おかしな所は無い。

だけど、また謎が一つ増えた気がした。

気が付いたら、と言うところが妙に引つかかる。それってやっぱ
りルルーシュと関係あるのだろうか？

一瞬そんな考えがカレンの脳裏に浮かんだが、ルルーシュとナリ
タの繋がりが見つからず、纏まらない思考を打ち消して俯いた。

「そうなの……」

今は何を聞いてもルルーシュと関連付けたくなくなってしまっ

それとも、やはり『ルルーシュ』なる存在は私の妄想なのだろう
か？

(誰か、答えを教えてください……！)

心の中で問い掛けても答えが返ってくるはずも無く、カレンは何
とも言えない気持ちでシャーリと共に教室へと駆け込んだ。

教室の出入り口の辺りでシャーリは不意に歩みを止めてカレン
の袖を引くと、思い出したように窓辺を指差して囁いた。

「そついえばさ、カレンが居ない間に転校生が来たのよ」

「転校生？」

「ほら、あの子よ」

カレンはシャーリがおもむろに指差す先を視線で追うと、若木色の長い髪を白いリボンで二つに纏めた見慣れぬ女生徒が窓辺の席で気だるげに頬杖を付いたまま外を眺めていた。

あれ、誰かに似ている…？

窓の外を見詰める少女の眼差しに既視感を憶えてハツとする。

(あの席……ルルーシユの席じゃないの)

事件の次の日、終ぞ埋まる事の無かったルルーシユの席に彼女は座っていた。

「誰、あれ……」

「だから転校生よ」

「そつじゃなくて、名前は？」

「えつとねえ、シィ・ツウさんだったかな。中華連邦からの留学生なの」

「留学……こんな時期に？もう二学期も半ばじゃないの」

随分とタイミングが良くないだろうか？季節外れの転校生などと言う、唐突に割り振られたような配役。

まるでルルーシユの痕跡を消すために現れたようだ。

確証は無いが、カレンにはそう思えてしょうがなかった。

「んーよく解らないけど、お父様のお仕事の関係で世界中を飛び回ってるんですつて」

「ふうん……そうなんだ……」

シャーリーの説明はともかく。何か納得できず、カレンは“転校生”怪訝そうに眺める。

絵に描いたような良くある事情。その理由に別段おかしな所は無かったが、どこか出来すぎているような気がした。

「あつほら、先生来ちゃうよー！」

二人の会話を断ち切るように始業チャイムが鳴り響き、シャーリ

は慌てたように席へと駆けて行く。

カレンも慌てて席に着くも、ギリギリまで転校生シィ・ツウから眼を離す事が出来なかった。

(もしかして彼女にはルルーシュに関わる何かがあるのでは?)

そんな思考が一瞬、頭を過ぎり、慌てて振り払う。

そもそも、彼女がルルーシュの席に座っている以外、どこにも接点は無じじゃないの。

不意に何とも言えない自己嫌悪に駆られ、カレンは思わず自分の頭をグシャグシャと掻き回した。

そんな事を考えている内に休み時間に入り、再び教室内がざわめき始めた。

「これが『サムライの血』殲滅戦で、これが『紅の月』、ナリタの『日本解放戦線』のもあるぜ！」

「すっげーな！。流石軍の記録班務めの親を持つ奴は違うな」

「へへへっ。でも内緒だぜ？父さんに部屋で見るのは良いけど外に持ち出すなってきつく言われてるからさ」

気になる単語が聞こえ、カレンは男子達が群れて騒いでる方を見た。どうやら軍の極秘資料に当たる戦闘映像を肴に盛り上がったいるらしい。

記憶にも新しい、ナリタとか日本解放戦線の名前を耳にすると胸が痛くてしょうがない。

自分達が不甲斐なかったばかりに手を貸す事が出来なかったのだから。

悔しさに堪らず、カレンは唇を噛み締める。

「それでさ、アレは手に入ったのか？」

“アレ”とは一体何なのだろう？

思わず会話に聞き入るカレン。

「ふっふっふっふ……」

「お、もしかして？」

「手に入りましたよ…最新資料だから苦労したぜえ？」

「やったじゃん！もったいぶらずにさっさと見せるよ」

もったいぶる少年に、仲間達は待ちきれずせがむ。

「まあ待てよ。…ゴホン。それでは！本邦初公開、撮りたて蔵出し
ホヤホヤ『黒の騎士団』殲滅戦でございます〜！！」

（黒の騎士団？）

「きゃっ！」

間違いとしか思えない単語に血の気が引き、思わず机から転げ落ちてしまう。その音に教室に居る生徒だけでなく、盛り上がっていた男子達も一瞬静まり返ってカレンを注視した。

しまったと思ったものの、カレンは震える身体を抑えながら立ち上がって男子達の所に行くと、男子の手からディスクを奪って眺めた。

その様子にあっけに取られる男子。

「カレンさん、こう言うの興味あったの…？」

周りに居た男子の一人が戸惑いがちにカレンに訊ねてくる。

「黙って」

「う…うん…」

鬼気迫るカレンの様子に黙り込む男子。

カレンはそれが自分の聞き間違いであってほしいと願いながら男子達の中心に据えてあった小型AV機器にディスクを入れる。間も無く、軽いザッピングの後に見慣れた光景が画面に広がった。

黒の騎士団基地の入り口だ。

声が聞こえる。司令官と思しき声が突撃の合図を出している。

その次の瞬間、特殊装甲に身を包んだブリタニア兵達の後ろ姿がフレームに雪崩れ込み、基地の入口が破られ、銃撃音と共に怒号と悲鳴が響き渡り始めた。

「ひっ……」

次々と撃ち殺されてゆく黒の騎士団員達。見慣れた顔も混じっていて、カレンは堪らず画面を閉じてしまう。

教室は静まり返ってカレンを注視している。

画面を伏せただけでスイッチを切られていない機械のスピーカーからはまだ怒号と悲鳴が漏れていた。

「カレン……大丈夫、夫？」

汚らわしい物から逃れるように後ずさると、シャーリーが今にも倒れそうなカレンの身体を支える。

「触らないで！」

カレンは咄嗟に方を支えようとするその手を振り払うと、教室を飛び出す。

「カレンー！！」

突然の事にシャーリーもクラスメイト達も茫然とその姿を見送るしかなかった。

嘘だ。

（あんなの嘘……映画のセットかなんかに決まっている！ 私の黒の騎士団がブリタニアなんかにはやられる訳が無いじゃない！）

カレンは悪い夢から抜け出すために黒の騎士団の基地へ向かって走った。

そうよ、あの辻を曲がればいつもと変わらない光景が…

「っ…！」

逸る気持ちのままにカレンは走る速度を上げて角を曲がると、基地の入り口の前で失速するように足を止めて立ち尽くした。

破壊され崩れた基地の入口。先程映像で見たままの光景がそこには広がっており、駄目押しのように“KEEP OUT”の文字が刻まれた黄色いテープで区切られていた。

その光景を呆然と眺めるカレン。それじゃあ、あの映像は本当にあった事だつて言うの？嘘…じゃあ、みんなは一体どうなったの？本当にみんな死んじゃったの？

目の当たりにしてもなお信じられず、カレンは中入って確かめようとする。

「駄目よカレン、今は軍の人達が作業してるわ。見つかったら怒られちゃうわよ！」

駆け出そうとしたところ止められ、驚いて振り向くと、シャーリがカレンの身体を背後から羽交い絞めにしていた。

「シャツ……シャーリー？！何で、こんなところに居るのよ！」

付けられた……よりもよってシャーリーにこんな所を見られてしまうなんて。

慌ててシャーリの手から逃れようと暴れるカレン。

「それはこっちのセリフよ！いきなり教室を飛び出して、一体何しようっていうのよ！？」

「そんなの、あなたには関係無いでしょ！離して、私は行かなきゃいけないの！」

「駄目、行かせない。行かせられる訳無いじゃないの。こんな所で！」

「君達、こんな所で何している」

揉み合う二人の騒ぎを聞きつけたのか、中で作業していた若いブリタリア軍人が二人の所へやって来る。

「あつ……」

軍人の姿にショックを受け、カレンは思わず沈黙する。

「すつすみません！この子軍事マニアで、どうしても中の様子が見たいって言い張るので止めてたんですよ。すぐ連れて帰りますから」「シャーリー！」

咄嗟に勝手な事を言うシャーリーにカツと来て睨みつけるも、逆に凄まれ返されてカレンは怯む。

「またか……全く、どこから情報が漏れてるんだかなあ。ちらほら学生が忍びこもうとするからその度に作業が中断して困ってるんだ。ここは危ない機械もあるし、テロリストと間違えて撃たれてしまう可能性もあるからさっさと帰れ。もう二度と来るなよ」

そう言っただけで軍人は二人に踵を返すと、今度は女の子だ、などと通信機器で状況を報告しながら作業に戻って行った。

その後ろ姿を茫然と見送るカレン。

それと同時に現実を突きつけられ、膝から力が抜けてゆく。

地面に崩れ落ちるカレン。爪に泥が入り込むのも構わず地面に爪を立てる。

黒の騎士団が消えてしまった。

(私の……黒の騎士団……お兄ちゃんが日本を取り戻すために作って、ゼロが……来てみんな大きくした……でももうゼロも居なくて……)

扇さんは？

井上さん、杉山さん、南さん、杉田さん……玉城……みんな……。

脳裏に浮かんでは消えて行く愛しい人達の幻。

(もしかして私だけ生き残っちゃったの?!)

絶望的な孤独感が、背中から這い上がってくるのを感じる。

「帰りましょ。雨が降ってきたわ……」

シャーリーは地面に膝を着くカレンを引き上げて空を見上げた。

まるでカレンの心を読んで狙いすましたかのように雨が降り始め、二人を濡らしてゆく。

「シャーリー……」

支えられたまま、力無くシャーリーを見上げるカレン。濡れた布越しに感じる体温がじわりと心と身体に染みる。

「ねえ……無理に、とは言わないけど……良かったら話を聞かせて。

心配なの……」

ペリドットの瞳を不安に揺らし、カレンを見詰め返すシャーリー。

ここまで見られては、もう言い逃れは出来ないだろう。

カレンは観念したように項垂れると、シャーリーにすがって大声で泣き始めた。

張り詰めていたものが崩れ、堪えていた想いを吐き出すように、ひたすら泣き続けた。

降りしきる雨の中、泣き続けるカレンをシャーリーは何も言わず強く抱きしめた。

「んーんんくんーんー…」

雑踏と雨音に微かな鼻歌が混じっている。

若い少年の声だ。

注意しないと聞き逃してしまいそうな歌声は、路地裏から聴こえていた。

路地裏の物陰で少年が一人、雑踏を避けて路地の狭間から道行く人々を眺めていた。

鼻歌の持ち主と思われる彼。髪は白く、ショートローブの付いた不思議な衣装をまとうており、顔を覆うヘッドホンの付いた繋ぎ目の無いサングラスから覗く幼さを残した顔立ちも、行き交うブリタニア人のものとは異なっている。

多分、異国の人間だろう。

人ごみを見詰めながら時折、苦しげに頭を抱えてうずくまる少年。しかし、暫くすると再び顔を上げて人ごみを眺め始める。

一体何を探していると言うのだろうか？

だが次の瞬間、不意に少年が身体を震わせて潜んでいた路地から身乗り出すと、ある一点を見詰めた。

その視線の先には二人の少女が身を寄せ合い、人々の視線から逃れるように道の端を歩く姿があった。

カレンとシャーリーだ。

「あんな所に隠れていたのか…」

そう言っただけ少年は鋭い眼差しで遠ざかる二人の後姿を見詰めると、実に嬉しそうな笑みを浮かべて睦言を囁くように呟いた。

「もうすぐ会いに行くからね…C・C…!!」

第一話(2)(後書き)

あまりに読みにくい部分には手を加えたが、正直書き直したいW
この小説を書き始めて数年。

ちゃんと完結させないとね。

自分にフアイト。

しかし、今のジャンルの小説も抱えていると言う

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2059n/>

君のいない明日

2011年4月23日19時25分発行